

ミルトンの『サムソン』におけるサムソンの英雄性について

福井, 由美子
九州大学大学院人文科学府 : 修士課程

<https://doi.org/10.15017/6790847>

出版情報 : 九大英文学. 45, pp.31-46, 2002-12-01. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



ミルトンの『サムソン』におけるサムソンの英雄性について

福井 由美子

Samson hath quit himself
Like *Samson*, and heroicly hath finish'd
A life Heroic, on his Enemies
Fully reveng'd ... (1709-12)¹

I サムソンの反英雄性

John Milton ジョン・ミルトンによる *Samson Agonistes* 『サムソン・アゴニスティーズ』の最終部分において、*Samson* サムソンの父 *Manoa* マノアは「サムソンは英雄らしく、サムソンらしく身を処した」と評価しているが、果たしてサムソンは英雄たり得たのであろうか。なぜ、サムソンを英雄と呼ぶことが出来るのであろうか。

そもそも、本作品の題材である聖書の *Judges* 「士師記」におけるサムソンは、英雄よりもむしろ反英雄と呼ぶにふさわしい。なぜなら、その行為は破壊的かつ暴力的であり野蛮だからである。このような反英雄的サムソンを、ミルトンは作品『サムソン』の中で、英雄にまで高めている。この点を始めとして、「士師記」から作品『サムソン』へはいくつかの変更点があるが、それらを、ギリシア悲劇という形式に則った改訂とミルトンが意図的に行った変更に分けることができる。サムソンが反英雄から英雄へと昇る点や、「士師記」において、サムソンよりも先に逝いた父マノアが、作品『サムソン』に

においては、サムソンの死の報告を受け、サムソンの人生を評価している点は、詩人ミルトンによる意図的な変更点の一つである。そして、この変更点こそが、作品『サムソン』を解釈する際に重要なのである。すなわち、ミルトンは、「士師記」における単なるならず者のサムソンに英雄性を与え、反英雄からキリスト教的英雄へと辿る過程を、作品『サムソン』に描きこんでいる。その際、父マノアには父としての重要な役割を与え、サムソンが英雄へと昇る過程で大きく貢献しているのである。

当然のことながら、ミルトンによるサムソンはかつて暴力的で破壊的だった過去を記憶の中に持っている。Chorus コーラスがその当時のサムソンを“[w]ho tore the Lion, as the Lion tears the Kid” (128)「ライオンが子ヤギを引き裂く様に、ライオンを引き裂いた者」と語っているように、サムソンはかつて野獣にも劣らないほどの強さを持っていた。サムソン自身が野獣であつたと言っても過言ではない。ただ力任せに、敵対する者を打ちのめすサムソンを、Harapha ハラファが“[a] Murtherer, a Revolter, and a Robber” (1180)「人殺し、暴徒、盗っ人」と罵ったことは、一部には的を射ている。確かに彼は強かった。しかし彼が単なる野獣に過ぎず、英雄にはまだ成り得なかったのはなぜであろうか。コーラスはその点を指摘してサムソンに、

thee whose strength, while vertue was her mate,
Might have subdu'd the Earth,
Universally crown'd with highest praises. (173-5)

と言っている。つまり“vertue”「徳」が欠けていたのである。力はあるが徳がない、肉体的には最強であっても、精神的な部分に欠如したものがあるというこの状態に関して、奴隷の身となったサムソンは己を省み、“O impotence of mind, in body strong!” (52)「ああ、体は強くても、精神が弱いとは」と嘆いている。ここには、サムソンの的確な自己認識が見られる。

このように冷静な自己認識をしつつも、サムソンは深い苦悩にさいなまれる。その大元の原因は、誰にも劣らない力によって自負を感じていたかつて

の自分と落ちぶれてしまった現在の自分との間に生じたギャップ、そして、誇りを感じていた自分を省みるとただ無意味に強かっただけという事実によるものである。その生まれを神によって二度も預言され、Philistine ペリシテ打倒という特別の任務を授かり最強の力を与えられて、特別の存在として生きてきたサムソンにとって、現在感じている劣等感、すなわち落ちぶれたという思いは甚だしい。故にそこから苦悩が生まれているのであるが、その苦悩を二種類に分けることが出来る。外的苦悩と内的苦悩である。前者は肉体的苦痛であり、後者は精神的苦痛を指す。さらに、サムソンの肉体的苦痛は常に精神的苦痛に働きかけ、精神的苦痛をさらに深くさせている。

外的苦悩とは、具体的には髪を切られたことによる体力の衰弱、奴隷状態での肉体労働、さらには目を抉り取られて陥った盲目である。とりわけ盲目に対する嘆きは甚だしく、詩人自身の苦境を代弁しているかの如くである。

Scarce half I seem to live, dead more then half.
O dark, dark, dark, amid the blaze of noon,
Irrecoverably dark, total Eclipse
Without all hope of day! (80-2)

暗闇に陥ったということは単に視覚を奪われたこと以上に、人生の光、すなわち「すべての希望」を失ったことに相当し、死んでいるのも同然であると、サムソンは感じている。暗闇の中を手探りで生きていかなければならない苦悩は単なる物理的な不都合だけでなく、精神的にも大きなダメージを与えているということが考察される。

一方で内的苦悩もまた同時に生まれている。かつて強かった頃の自分と比べ、落ちぶれてしまったという思いが、相矛盾する二つの思いを生み出している。すなわち、神に対する疑念と、神を信じ続けようとする信仰の狭間で葛藤である。ペリシテ打倒という任務を与えた神に対する非難を抱きそうになりながら、悪いのは自分であって神ではないと信じ込もうと努力している。このような逆境を与えられても尚、神を信じつづけることは非常に難し

いからである。神への疑念と信仰の葛藤は、最初は五分五分である。サムソン自身、まさしく暗闇を手探りで模索するかのごとく、強者から弱者への転落をどのように捉えればよいか、神を疑うべきか信ずるべきかを模索している。時に神への疑念に向かったと思えば、次の瞬間にはそのような疑念を抱いた自分を責め、そもそも自分にこそ非があり、神は悪くないのだと信じようとしている。父の前で吐露した“sense of Heav’n’s desertion” (632)「神に見捨てられた思い」を感じるというサムソンの言葉は、相克する二つの思いの中で、もがき苦しむサムソンの苦しみの深さを示している。つまり、神に見捨てられたと思うほどの悲痛を味わっているという程度を示しているのであって、本当にそのように感じているわけではないだろう。実際のところ、サムソンは、この逆境の中にあっても神を信じているからこそ“[God’s] pardon I implore” (521)と告白しているのである。しかし、疑念と信仰という葛藤の天秤は、時として一方に、瞬時に傾いてしまうほど緊張かつ不安定な状態である。当初は五分五分であった葛藤は、一方への傾斜を繰り返しながら、次第にしかし確実に神への信仰へと傾いていく。しかし、神を信じようとすればするほど、今度は自分を責めることになり、再び精神的苦痛の中に放り出され、疑念と信仰という葛藤に直面する。このようにサムソンの内的葛藤は、一見すると出口のない円環構造をなしており、サムソンは終わりのない苦しみの中で、もがき続けているのである。

このような外的苦悩と内的苦悩の間には、前者から後者へと向かう影響力を示す矢印が見られる。つまり、外的苦悩を思い嘆けばそれだけ一層、内的苦悩が深くなっていくのである。作品冒頭において、外的苦悩を表す奴隸の身と盲目について嘆いていると、次第に内的苦悩を意味する内省へと向かっている。その内省を深めていくうちに、先に指摘した内的苦悩の円環構造の中に落ち込み、外的苦悩はほとんどなくなり、内的苦悩のみがサムソンを苦しめるようになる。そのことについて、サムソンは以下のように語る。

torment...
.....
must secret passage find
To th' inmost mind,
There exercise all his fierce accidents,
And on her purest spirits prey,
As on entrails, joints, and limbs,
With answerable pains, but more intense,
Though void of corporal sense. (606, 610-616)

肉体的苦悩からはもはや解放されたものの、精神的苦悩はその倍以上にふくれ上がっている。この段階でのサムソンは、肉体的衰弱もさることながら精神的衰弱は甚だしく、もはや英雄たるにはふさわしくない。

深い精神的落胆に落ち込み、逃げ場のないサムソンが唯一見つけ出した、苦しみから逃れる方法が“speedy death” (650)「すみやかな死」である。サムソンが、盲目と死を意味する“double darkness” (593)「二重の暗闇」が間もなくやってくると言い出したことは、預言めいている。サムソンが、その日の内に死ぬという後の作品展開を先に追うならば、サムソンの死の預言は後の伏線になっていると言うことが出来るだろう。しかし、サムソンがここで望んでいる死は神の意に反する死であり、また苦しみから逃れたい一心から望み、結局は死を手に入れて行き着く先が“darkness”にすぎないという点において英雄らしからぬ死である。神に疑念を感じつつも、信じつつけているサムソンは、死を求めることが神の意に反することであると分かっているため、結局、自ら死を求めることができず、ただ深く苦しむのみである。

Ⅱ サムソンの英雄性

前章で指摘したような苦しむサムソン像というのは、ミルトンの『サムソン』に特有のものである。先に述べたように、「士師記」におけるサムソンは

破壊的かつ野蛮であり、奴隷になった後の苦悩するサムソンの姿は描写されておらず、単純な人物としてのみ描かれている。

また、ミルトン同様に「士師記」のサムソンを素材にした、他のサムソン物語²においても、苦悩するサムソンは全く登場しない。これらのことから考えて、苦悩するサムソン像はミルトン特有のものであると考えてよいであろう。では一体、ミルトンがサムソンに深い苦悩という要素を与えたのはなぜであろうか。また、他のサムソン物語と比較してミルトンの『サムソン』に特徴的なこととして、父マノアが登場する点も見逃すことが出来ない。他作品においては、父ではなく母が登場しており、父が登場しているものには必ず母も登場している。「士師記」においてサムソンよりも先に逝いている父を、ミルトンが敢えて登場させているのはなぜであろうか。ミルトンが意図的に父を選び登場させているのは疑いないであろう。では、一体、ミルトンが父親という存在に見出した意義は何であろうか。

ミルトンがサムソンに苦悩という要素を与えた理由は、詩人自身が盲目の境遇に置かれていたことを考慮に入れると、ミルトンは盲目のサムソンに自らを重ね合わせていたと考えられる。故に、自然と熱がこもり、サムソンによる盲目の嘆きは、その苦しさをよく伝えていることも合点がいく。しかし、ミルトンがサムソンに苦悩という要素を与えた理由を、詩人とサムソンの盲目という共通点だけに絞るのは早計に過ぎるであろう。更なる理由は、サムソンに英雄性を賦与するためということが考えられる。サムソンはこの肉体的精神的苦悩という逆境の中で耐えなければならない。ミルトンは苦悩を、英雄になるための試練、英雄になるために乗り越えねばならぬものと考えているのではなかろうか。サムソンはこの苦悩の中で、父マノア、妻 Dalila デリラ、そしてハラファの訪問を受けているが、後者二人は、明らかにサムソンに敵対し、挑発している。そして、この二人の訪問もまたサムソンにとっては試練であると考えられる。

デリラがやって来た当初の二人の言い争いはまだ、夫婦の諍いという程度である。ところが、話をしているうちに、デリラはサムソンを“enemy” (856) と呼び、一方サムソンはデリラのことを “[i]n feign'd Religion, smooth

hypocrisy” (872)「うその宗教における惑わしの偽善」と言っているように、二人の諍いは宗教的対立にまで発展している。二人の決別を最終的に確実にしたデリラの言葉は、サムソン一族に罵られても、自分は自分の国で“[f]ame” (971)が得られるのだからそれで良いというものであるが、サムソンがデリラほど「名声」を過剰に善いものとは判断しない点³に、デリラとサムソンの価値観の差が明瞭に表れている。デリラとサムソンの間の宗教的対立が明らかになった後に、サムソンがデリラの挑発に、もはやかき立てられることがないのは、価値観の差に基づくサムソンの冷静な判断によるものと思われる。さらに、デリラ訪問の理由を“God sent her to debase me, / And aggravate my folly...” (999-1000)「神は私を卑しめ、愚考を重ねさせるために彼女を来させたのだ」としている点もまた、神が自らに与えた試練を冷静に認識しているからであると考えられる。サムソン夫婦の諍いは、宗教に基づく価値観の差によって宗教的対立に発展し、サムソンの冷静な判断力によってその対立は治まったのである。デリラの挑発という逆境を耐え抜いて、冷静な判断力を見せるサムソンは、徐々に英雄へ向かいつつあると言える。

ハラファの場合、サムソンのもとにやって来た当初は、デリラと同様に、個人対個人の対立であるが、話をしている間に宗教的対立が明らかになる。しかし、デリラとの対立と違う点は、サムソンがデリラを全く相手にせず冷静に判断していたのとは違い、挑発しているのはハラファではなくサムソンだということである。デリラは一方的に自らの宗教を誇るのみであったのに対して、ハラファはサムソンの神を卑しめる言葉を吐く。これにサムソンは憤りを感じ、ハラファを挑発する態度に出たものと考えられる。ハラファに対して、“whose god is God, / Thine or whom I with Israel's Sons adore” (1176-7)「どちらの神が本当の神か、お前の神か、イスラエルの子らと共に私が信じる神か」と迫るサムソンはもはや、自分自身の内にあった内的苦悩を乗り越えて、神を信じきっているように思われる。ここにもまた、ハラファの挑発という逆境を乗り越えた、英雄へと向かうサムソンの姿が見られる。

デリラとハラファの訪問がサムソンの内にかき立てたものは、先に指摘し

たサムソンの内的苦悩のうちで天秤にかけられていた神への信仰心であろう。すなわち、サムソンは自分自身の問題で苦悩しながら、デリラとハラファの挑発という宗教的対立に直面することによって、神への疑念が消え、神を信じる気持ちが確固としたものになったのである。それは、自らの内にあった内的苦悩という逆境を確実に乗り越えつつあるという意味で、まさしく英雄への一途を辿っていると考えられる。

作品『サムソン』において、デリラとハラファの訪問による宗教的対立という試練をはさむような形で、コーラスによって忍耐に関する助言がなされているが、それらの言葉はサムソンが二人の挑発に耐え、逆境を乗り越えて初めて、その意義深さが分かる。コーラスはデリラ訪問の前には“Patience as the truest fortitude” (654)と言って、「忍耐」という徳目を褒め称えている。この場面において、コーラスが意味するところは、サムソン自身の内にある苦悩に対して「忍耐」するようにという助言である。しかし、ここにはさらなる意味があるように思える。すなわち、これからやって来るデリラとハラファに対して、「忍耐」をもって対応するようにという忠告の役割を果たしているのである。また、ハラファ訪問の後には“patience is more oft the exercise / Of Saints, the trial of thir fortitude” (1287-8)とある。コーラスは、サムソンが自らの内にある苦悩とさらに与えられたデリラとハラファによる挑発という“the exercise”、そして“the trial”を「忍耐」で乗り越えたということを意味していると言える。今や試練を乗り越えたサムソンは、先にコーラスによって指摘された、欠如していた「徳」、とりわけ「忍耐」という徳目を獲得し“Saints”の一人として認められたのである。しかし、この段階でのサムソンは、まだ英雄には成り得ていない。なぜなら、死への願望を捨て去ることが出来ないでいるからである。

コーラスは、このようにサムソンに対して、客観的に助言を行っているが、一方で父マノアは、父という立場ゆえの行動と助言を行っていると考えられる。ミルトンの『サムソン』において、ミルトンが意図的に行ったと思われる改定⁴のうち、父の登場に関して、ミルトンが父マノアに与えた意義は二つあると考えられる。一つは父ゆえに出来るサムソン認識であり、もう一つ

は父としての権威と威厳である。前者に関して、マノアは、過大評価している場合もあるものの、父であるからこそサムソンの痛みも、秘めた能力的に認識している。破壊的なまでに強かったサムソンを“[e]quivalent to Angels” (343)と評価しているが、野蛮極まりないサムソンを“Angels”にたとえるのはやり過ぎだとしても、これは単なる間違ったサムソン認識ではなく、父ゆえに子の持つ能力を見抜いてのことであると考えられる。また、マノアは苦悩の真只中にいるサムソンに対して、厳しい言葉を浴びせてたしなめることで、父としての威厳を発揮していると言える。さらにマノアはペリシテ人に息子の身代金の話を取り付けることによって、サムソンとは違う形でペリシテ人たちに挑んでいるのであり、その挑戦によって父としての“authority”「権威」を発揮している⁵と考えられる。

マノアは、父として出来る範囲内のことでペリシテに挑み、息子をバックアップしようとする姿勢を見せているものの、サムソンはそれを拒絶していることは注目に値する。家父長制というイデオロギーの中において、父という存在は家族の頭、一族の象徴的存在である。サムソンがマノアの身代金の申し出を拒絶することは、サムソンが家族、さらには一族を拒絶することを意味する。サムソンは苦悩しているにも関わらず、すべての苦悩から自らを解放してくれる身代金という父の提案を断り、デリラとハラファの挑発というさらなる試練を受けながらも、確実に神への信仰を固め、「忍耐」という徳目を身に付け、英雄への道を着実に歩んでいる。サムソンの伸びつつある髪に再び力が戻り始めたサムソンが感じることはできたのは、サムソン自身が再び神を信じるようになったからである。

様々な試練を乗り越え、欠如していた「徳」を獲得し、神への信仰を固めたことで一度は失った力を再び取り戻したサムソンは、ただ一点を除いては英雄たるにふさわしい。その一点とは、サムソンが苦悩から逃れるために抱き続けた死への願望である。サムソンは苦悩している真只中で、預言するとき死の願望を抱いていたが、コーラス一行と別れ“the Temple of Dagon” (1370)「ダゴンの宮」へ向かう間際さえも、忍び寄る死の予感から解放されることはない。“This day will be remarkable in my life / By

some great act, or of my days the last” (1388-9)という、このサムソンの言葉は、その予感をよく伝えている。しかし、「ダゴンの宮」へと行くことを決意し、

Happ’n what may, of me expect to hear
Nothing dishonourable, impure, unworthy
Our God, our Law, my Nation, or my self, (1423-5)

と言うサムソンが覚悟した、まもなく訪れるであろう死は、苦痛から逃れるために求めていた死とは違う。なぜなら、この時覚悟している死は、神への絶対的な信仰に基づいているからである。

サムソンは、父の申し出た身代金を断ることで、家族や民族、国家との縁を断ち切ろうとしていたと言える。しかし、それは孤立無援になるということではない。神を信じつづけることで、神からの全面的なバックアップを受けることが出来るからである。ここでの「神を信じる」ということは、先に指摘したサムソンの内的苦悩における場合のように、自分自身を責めるということではない。試練に悩まされていた頃よりも、「徳」を身に付け格段に成長したサムソンが神を信じることは、自分自身の“great transgression” (1356)を悔いて、神に許しを求めることを意味する。サムソンの髪に戻った力は、サムソンによる神への信仰の再開の証しであり、同時に神の許しの証拠として見る事が出来る。もはや、サムソンは一個人、一国民を超えて、一人のキリスト教徒として、反キリストの全てに立ち向かおうとするキリスト教的英雄となろうとしている。

結局はペリシテと共に命を落としてしまうものの、ペリシテを倒したのであるから、まさしくその死は「復讐」であり、サムソンが以前に望んでいた死とは全く意味が違う。以前に所望していた死は、苦痛から逃れるための手段であったために、死を手に入れても行き着く先は“darkness”に過ぎなかった。しかし、実際のサムソンの死は、神を信じつづけたが故に救われたという意味でのキリスト者としての殉教である。サムソンがようやくキリスト者

として完全なる英雄性を身に付けた時というのは、まさに死の瞬間であったと言える。「英雄らしく、サムソンらしい」死を手に入れたサムソンは、“darkness”に陥るどころか、信仰の道を照らす“inward light” (162)「内なる光」に照らされるという意味での光を回復していると考えられる。肉体的には盲目であっても、精神的には光に照らされていることは、キリスト者として「英雄らしい」ことであり、サムソンが「サムソンらしい」のである。ここには、「士師記」における単なるならず者の反英雄がキリスト教的英雄へと昇るプロセスを作品『サムソン』に描きこんだ、盲目である詩人自身の光の回復をも見ることが出来るであろう。

III 英雄サムソンと詩人ミルトン

「士師記」における反英雄から、『サムソン』の中で英雄としてのサムソン像を完成させることは、詩人ミルトンにとってどのような意味があるのだろうか。サムソンとミルトンの最大の共通点である盲目という点に関して、サムソンの悲嘆は先に指摘した箇所によく表されているが、ミルトン自身の盲目の嘆きは、1673年の *Poems*『詩集』に収録されたいわゆる「失明のソネット」として知られるソネット 19 番“*When I consider how my light is spent*”の中で、サムソンによる嘆きと非常によく似た心境が表されている。その心境は、暗がりの中を生きていかねばならない絶望だけでなく、わずかに抱きそうになる神への疑念をもサムソンと共通している。

When I consider how my light is spent,
E're half my days, in this dark world and wide,
.....
Doth God exact day labour, light deny'd,
I fondly ask; But patience to prevent
That murmur, soon replies, God doth not need
Either man's work or his own gifts, who best

Bear his milde yoaik, they serve him best...

.....

They also serve who only stand and waite.

(1-2, 7-11, 14)⁷

サムソンが、欠如していた徳目である「忍耐」によって神への信仰を回復したのと同様に、ミルトンの場合も、「忍耐」が詩人をたしなめることで、詩人自身の内に確固とした神への信仰を取り戻している。これは同時に、ミルトン自身の内に一詩人としての意識が高まったことも意味する。すなわち、ミルトンはこのソネットの冒頭で、盲目という自らの個人的状況を嘆いていたが、その状況を徐々に一般化し、「神のやさしいくびきをよく負う者」という、逆境に耐える者について詠っている。これにはサムソンやミルトン自身が含まれる。そして、さらに、「ただ立って待つ者」にまで一般化されている。つまり、自分自身の内面のみを見つめていた詩人の視野が、自分以外の周囲に向けられるようになったのであり、詩人自身の個人的状況が、社会的状況にまで高められているということである。ここに、ミルトンの詩人としての自己認識の高まりを見ることが出来るであろう。社会的状況を詠うことを詩人の使命とし、それを神に与えられた任務として認識しているのである。

ミルトンの、神に与えられた任務というこの意識は、かの壮大なる叙事詩 *Paradise Lost* 『楽園喪失』の invocation によく表されている。殊に、第3巻冒頭における invocation には、このソネットにおける自己認識の高まりと同様の状況が詠われている。

thou Celestial light

Shine inward, and the mind through all her powers

Irradiate, there plant eyes, all mist from thence

Purge and disperse, that I may see and tell

Of things invisible to mortal sight. (III, 51-55)⁸

ここには、自らを特別な存在として認識するミルトンの意識が見られる。その意識とは、神の使者としての使命感と換言できる。「人の目には見えない事物を見て語る」という、神に選ばれし詩人としての使命感である。ペリシテ打倒という任務を神から授かったサムソンを英雄へと至らしめた、サムソン自身の自己認識と共通するものである。このことは、サムソンとミルトンの共通点が、盲目という肉体的側面のみならず、精神的側面にまで及んでいることを示しており、「忍耐」によって同様に苦悩を乗り越えているということが考察される。

このように、盲目によって神への疑念に陥りそうになりながら、確固とした神への信仰を取り戻すサムソンとミルトンが、各々の内にある苦悩を乗り越え、神に与えられた任務を遂行しようとしている姿は、もはや個人的レベルを超えている。神から任務を与えられた一詩人として、個人的状況を超え、社会的状況を詠うミルトンの場合、社会的状況のアナロジーとしての 17 世紀イギリスの政治的状況を、作品『サムソン』に織り込んでいると言うことが出来る。ミルトン自身が置かれている社会的政治的状況を、作品中に描きこんでいるのである。サムソンとミルトンがそれぞれ置かれた政治的状況に対照が見られるからである。サムソンはイスラエル人、つまり“just men long oppress” (1269)の一人であり、敵対するペリシテ勢力、すなわち“th’ oppressour” (1272)たるダゴンによる圧政に苦しめられている。この対立構図は、ミルトンが置かれた 1660 年の王政復古以降のイギリスにおける政治情勢をも示唆していると考えられる。つまり、“just men long oppress”たる共和派すなわちピューリタンと、“th’ oppressour”たる Charles II チャールズ 2 世の率いる王党派すなわちカトリック勢力との対立である。ミルトンは王政復古後の“oppress”の状況の中でカトリックによる圧政に苦悩しながら生きている。サムソンが、奴隷となった自らの状況を嘆き、吐露する

made hereby obnoxious more
To all the miseries of life,
Life in captivity

Among inhuman foes. (106-9)

という思いは、奴隷に成り下がったサムソンの心境のみならず、王政復古によって、カトリックによる「捕われの生活」を強いられたミルトンを始めとするピューリタンの心境をも読み取ることが出来るのではなかろうか。

先に言及した『詩集』と同年に発表された *Of True Religion* 『真の宗教について』の中で、ミルトンはカトリックの行う偶像崇拝を槍玉にあげて、カトリックを徹底的に批判している⁹。作品『サムソン』において、サムソンに敵対するペリシテが偶像崇拝を行っていることは、このことに呼応しているように思われる。

thir [*Philistian*] hearts were jocund and sublime,
Drunk with Idolatry, drunk with Wine,
And fat regorg'd of Bulls and Goats, (1669-71)

ペリシテが行う偶像崇拝、飲酒、大食はすべて、ミルトンが『真の宗教』において禁止していることである。特に、後者の二つに関して、飲酒や贅沢は、カトリックがはびこることを妨げるための最後の手段として、ピューリタンに自粛するよう求めている事項でもあるので、ここにはカトリック批判と同時に、ピューリタンに対する自制の意味も込めていると言える。さらにサムソンが酒を断って成長していることは、「真の宗教」の実践であると考えられる。

このように、詩人と同様の立場に置かれたサムソンを、キリスト教的英雄、つまり反キリスト勢力に対する勝者として描き上げることは、詩人ミルトンにとって、自分自身の勝利をも意味するであろう。つまり、詩人が抱きそうになった神に対する疑念を払拭し、自己認識を新たにすることである。また、自らの理想をサムソンに託し、それを実現させているとも考えられる。では、一体ミルトンの理想とは何であろうか。それは、共和制を再び樹立することと考えられる。カトリックによる圧政から、「真の宗教」たるピューリ

タンを解放し、ピューリタンによって共和制を復活させることである。サムソンの死に際して、コーラスによってたとえられた不死鳥の復活は、この共和制の復活をも示唆しているだろう。

So vertue giv'n for lost,
Deprest, and overthrown, as seem'd,
Like that self-begott'n bird
.....
Revives, reflourishes, then vigorous most
When most unactive deem'd, (1697-9, 1704-5)

苦悩を乗り越え、光を取り戻すサムソンは、ミルトンのこの理想を体現しているのである。このことは、聖書の中の反英雄が、ミルトンの手によって、英雄にまで高められたということだけでなく、サムソンが 17 世紀イギリス社会のピューリタンにとっての英雄になったことをも意味するのである。作品『サムソン』は、『樂園喪失』と同様に、聖書から題材を得ながらも、『樂園喪失』とは違い、一キリスト者の英雄物語というだけではなく、ミルトンと同時代の人々にとっての英雄物語でもありうる点に、サムソンの英雄性の意義があるのではなかろうか。

註

1. John Milton, *Samson Agonistes*, from Roy Flannagan, ed., *The Riverside Milton* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1998). 本編におけるミルトン作品からの引用はこの版によるものとし、括弧内に行数のみを記す。
2. 本編において、「士師記」よりサムソンの題材を得たいくつかの先行作品を「他のサムソン物語」として扱うこととする。具体的には、他言語で書かれた5つの作品の英訳 Watson Kirkconnel, *This Invincible Samson* (Toronto: University of Toronto Press, 1964) 3-142 を参照。

3. キリスト教徒にとっての「名声」の追求に関しては、William B. Hunter, Jr. ed., *A Milton Encyclopedia*, vol. 3 (London: Associated University Press, 1979) 180-1 を参照。Hunter はキリスト教徒が“the pursuit of honor”「名誉の追求」を制限されている理由を二点挙げて論じている。
4. これらの改定のうち、ギリシア悲劇の慣例的形式に則ったものに関して、ミルトン自身が『サムソン』の序文において「三一一致の原則」に従うことを言明しているが、このことに関して、Potter は興味深い視点から議論している。Lois Potter, *A Preface to Milton*, 2nd ed. (London: Longman, 1978) 98 を参照。Potter は、ミルトンが「三一一致の原則」を遵守するのは「古典悲劇の理想に則るためだけではなく、サムソンの意識が作品中における統一的な力にまで及んでいることを強調するためでもある」と主張している。
5. 父親としての“authority”に関しては、Marjorie Hope Nicolson, *John Milton: A Reader's Guide to His Poetry*, Rev. ed. (London: Thames and Hudson, 1970) 350 参照。
6. 罪を犯した後に、神との交わりを保つ方法に関して、Bennett は *Paradise Lost* の天使 Michael の言葉を取り上げて議論を展開している。Joan S. Bennett, “A Reading of *Samson Agonistes*”, from Dennis Danielson ed. *The Cambridge Companion to Milton* (Cambridge: Cambridge University Press, 1989) 230-1 参照。
7. Milton, “When I consider how my light is spent”.
8. Milton, *Paradise Lost*. 括弧内に巻数と行数を示す。
9. ミルトンは *Of True Religion* において、間違った宗教は人間が作った伝説を信じ込み、神の言葉に付け加えを行うのであり、その最たるものがカトリックであるとしている。カトリックの平信徒が聖書を読めない点を挙げ、プロテスタントは皆、母国語で聖書を読めるのであって、常に聖書を読むことで、カトリックに陥ることを防ぐことが出来るとしている。そして、最終的には、贅沢や酒を控えて、自らの生活を自粛することを勧めている。